

学位論文要旨

氏名 全 美炷

題目：東京語におけるアクセント句形成の研究—実験及びコーパスによる dephrasing の分析—

本研究の目的は、二つ以上のアクセント句が一つのアクセント句にまとまる dephrasing 現象がいかなる環境で生じるかを確率論的な手法により検討することである。先行研究では、同じ条件にある同じ2文節であっても dephrasing は生じることもあれば生じないこともあり、予想不可能な現象であるとされている。本論文では、dephrasing は偶発的に生じるのではなく、韻律的・統語的要因が影響して生じる韻律現象であり、その影響は統計的に80.22%まで予測可能であることを示す。Dephrasing の生起要因として本研究で取り上げるのは、モーラ数、発話速度、修飾関係、格助詞、アクセント型の組み合わせ、フォーカス、XP (Maximal Projection) 境界の有無、2文節の位置、レジスター、話者の性別、年齢、出生年度の12要因である。

第1章 序論

東京語における韻律構造について概略し、アクセント句 (以下、句と略す) 及び dephrasing 現象とは何かを説明する。その後、句に関する2種類の定義を紹介し、本研究の立場を述べる。

第2章 研究方法

Dephrasing の認定基準について論じた先行研究を検討し、本研究における認定基準を述べる。その後、用いる資料について説明をし、各資料の構成について詳述する。資料は、実験音声と『日本語話し言葉コーパス』(以下、CSJ と記す) の自発音声の二つを対象とする。実験資料は東京語話者5名による音声を実験環境で録音したもので、CSJ 資料は CSJ のうち韻律研究用アノテーションが付与された CSJ-Core を対象としたものである。次章から第8章までのタイトルは当該章で検討する要因である。

第3章 モーラ数及び発話速度

第3章では、2文節の合計モーラ数 (6~13 モーラ) の増加に伴い dephrasing 率が低下し、前部・後部のいずれかが増加する場合にも dephrasing 率が低下することを示す。また、発話速度の増加に伴い dephrasing 率が上昇し、合計モーラ数が同じ場合は dephrasing が生じた2文節が生じていない2文節より発話速度が高いことを示す。最後の議論では、モーラ数の増加が dephrasing 率を低下させる原因及び発話速度の増加が dephrasing 率を上昇させる原因について考察する。資料は

CSJ の 7650 サンプルを対象とする。

第 4 章 修飾関係及び格助詞

CSJ (7650 サンプル, 2059 サンプル), 実験資料 (600 サンプル) を対象に, 2 文節の修飾関係及び統語機能 (格助詞) が dephrasing 生起にどのように関わるかを検討する。統語的に限定を行う部分にはフォーカスがあるという先行研究に基づき, 連体修飾 (形容詞+名詞, 動詞+名詞, 名詞ノ+名詞) の前部にはフォーカスがあるが, 連用修飾 (名詞ガ格+動詞, 名詞ヲ格+動詞) の前部にはフォーカスがないと仮定し, 連体と連用の dephrasing 率を比較する。また, 2 文節 (連体修飾) の統語機能に注目して, 2 文節が述語の場所, 頻度, 手段, 時間などを限定する副次補語 (ニ・デ格) として機能する場合はその 2 文節全体にフォーカスがあるが, 必須補語 (ガ・ヲ格) として機能する場合はフォーカスがないと仮定し, ニ・デ格とガ・ヲ格の dephrasing 率を比較する。

結果として, 連体修飾 (特に, 形容詞+名詞, 動詞+名詞) が連用修飾より dephrasing 率が高く, ニ・デ格がガ・ヲ格より dephrasing 率が高いことを示す。統語的フォーカスが dephrasing を形成するメカニズムについても具体的に考察する。

第 5 章 アクセント型の組み合わせ

第 5 章では CSJ (242 サンプル) 及び実験資料 (600 サンプル) を対象に, アクセント型の組み合わせと dephrasing 生起の関係を検討する。Dephrasing 率は, 「無核語+無核語」において最も高く, 「有核語+無核語」あるいは「無核語+有核語」においてより低く, 「有核語+有核語」において最も低いことを示す。その後, 有核語が dephrasing 率を低下させる原因を考察する。

第 6 章 フォーカス

実験資料 (900 サンプル) を対象に, フォーカスを要因とした分析を行う。実験文の中にフォーカスを限定しない発話 (focus 0), 2 文節の前部にフォーカスを限定した発話 (focus 1), 2 文節の直後の語にフォーカスを限定した発話 (focus 3) を検討する。結果として, dephrasing 率は focus 1 > focus 3 > focus 0 の順に高く, フォーカスの存在は dephrasing 率を上昇させる効果を持つことを示す。最後の議論では, 2 文節の前部にあるフォーカス, 2 文節の直後の語にあるフォーカスが dephrasing を形成する過程について検討する。

第 7 章 XP 境界の有無及び 2 文節の位置

実験資料 (360 サンプル) を対象に, XP 境界の有無によって dephrasing の生じる傾向が異なるかを検討し, XP 境界が存在しない 2 文節が存在する 2 文節より dephrasing 率が高いことを示す。また, XP 境界が存在する 2 文節においても dephrasing が生じる原因を探索する。

次に, 実験資料 600 サンプルを対象に, 2 文節が発話文の文頭に位置するか文中に位置するか

によって dephrasing が生じる傾向が異なるかを検討し、2 文節の発話中の位置は dephrasing 生起に影響しないことを示す。

第 8 章 レジスター及び話者の性別、学歴、出生年度

CSJ 資料を用いて、レジスター及び話者の性別、学歴、年齢が dephrasing 生起にどのように影響するかを検討する。レジスターは学会講演・模擬講演・対話の 3 水準、話者の性別は男・女の 2 水準、学歴は高校卒・学部卒・修士以上の 3 水準、出生年度は 1930 年~1939 年、1940 年~1949 年、1950 年~1959 年、1960 年~1969 年、1970 年~1979 年の 5 水準を用いる。模擬講演・対話が学会講演より dephrasing 率が高く、dephrasing 現象は砕けた発話場面に現れる可能性が高いことを述べる。話者の性別及び学歴は dephrasing 生起に関与しないが、話者の出生年度は関与していることを明らかにする。若い年代ほど dephrasing 率が高いが、これは若い年代ほど発話速度が高いことと関連していることを示す。

第 9 章 交互作用及びモデルの検討

AIC (Akaike's Information Criterion) によるモデル検討を行い、要因間の交互作用及び最良モデルを検討する。また、CSJ、実験資料のいずれにおいても複数の変数を採用したモデルが AIC 最小モデルとして選択された結果に基づき、dephrasing は一つの要因によって生じる現象ではなく、複数の要因によって生じる現象であることを述べる。要因間の交互作用についても詳細に検討する。

第 10 章 結論

終章では本研究の結果をまとめ、結論及び今後の展望を述べる。結論として dephrasing は、イ) 偶発的に生じる不規則的なものではなく統語的・韻律的要因が関わって生じる現象であり、その生起はある程度予測可能であること、ロ) 確率的な現象であること、ハ) 複数の要因により生じる韻律現象であることを述べる。その後、残された課題をまとめる。